

## 近代日本における欧米の育児・保育論の受容と展開 養育責任に着目して -

分担研究者 内藤知美（鎌倉女子大学講師）

### 研究要旨

日本の近代的保育論にみられる「養育責任」の言説は、欧米、特に19世紀アメリカの女性の活動を背景に成立し、来日婦人宣教師を通して日本に受容され展開された。その歴史的経緯をたどることで、明治期の保育論における「養育責任」の特質を明らかにした。その結果、19世紀アメリカの女性が、「私」領域を拡大する上で、積極的に母親役割を強調したことが明らかになった。また日本の保育事業に先駆的役割を果たした来日婦人宣教師の保育実践において、母親役割を強調する側面が見られ、また同一の理念が様々な階層へ向けられた。婦人宣教師の活動は、女性自らが「母を生きることを主体化する」方向へと導くと同時に、画一的で理想的な母親像に収斂させる側面をもっていた。

### A. 研究目的

本研究は、明治近代の育児・保育論の特質を明らかにすること目的とした。明治近代の育児・保育論を異文化交流の産物としてとらえ、媒介者としての来日婦人宣教師の役割に着目することによって、日本の保育施設における育児・保育論の受容と展開の問題を検討するものである。婦人宣教師は、実践を通して育児・保育論を直接的に伝達したのみならず、女子教育を通じて間接的影響を与えた。本研究では特に、欧米の育児・保育論に内在する「養育責任」の問題が、保育施設において言説としていかに析出し、実践されるのかを検討した。

なお、本研究の意義は以下の点においてである。1) 当時の育児・保育活動は、子どもの育て方や方法の伝授に主導的役割を担ったのみならず、女子教育と連携して、女性の生き方を規定するという性格をもっていた。2) 近代的保育の出発点が、明治の育児・保育論にあるとすれば、そこに内包される「養育責任」の問題が、少なからず今日の保育施設、すなわち「少子化」問題に対応する子育て支援の中心的役割を果たす保育施設の理念の中に継承されていると考える。

### B. 研究方法

本研究は史料の収集、精査・分析による実証的研究である。具体的には、日本の保育事業の黎明期に先駆的役割を担ったアメリカン・ミッション・ホームの母胎であるアメリカ婦人一致外国伝道協会(Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands 略称 WUMS) および長老派婦人伝道局の史料から、19世紀アメリカの社会的土壌を探る。さらに、その理念が実践の場でどのように発現されたのかを考察するため、来日婦人宣教師の手によって開かれた保育・託児所「横浜お茶場学

校 (Tea School)」を一つの具体的事例として取り上げる。日本の保育・託児所の嚆矢とされる新潟静修学校の付属施設は、1890 (明治 23) 年に開設されたが、お茶場学校は、1878 (明治 11) 年という極めて早い時期に始められた。同学校については、学校の存在にのみ言及されてきたが、今回、新史料の発掘によって、宣教師による活動の内容が検討可能となった。

#### (倫理面への配慮)

なおこの研究は、文献資料によるものであり、研究対象に不利益・危険を与えるものではない。

### C. 研究結果

#### 1. 日本の近代保育事業と婦人宣教師の関連

明治時代以降、欧米との接触を通して、欧米を範とする自由主義的で「近代的」な思想が移入された。日本の保育事業については、女子教育と両輪をなす形で、19世紀アメリカの影響、特に来日アメリカ婦人宣教師がその先駆的役割を果たし発展してきた。

その一例をあげるならば、最初の幼稚園といわれる東京女子師範学校附属幼稚園の創設に尽力した中村正直や関信三が、アメリカ婦人一致外国伝道協会のアメリカン・ミッション・ホーム (現在：横浜共立学園) の活動に共感し、中村が生徒募集広告を書いたことはよく知られている。また最初の私立幼稚園である桜井女学校附属幼稚園は、アメリカン・ミッション・ホームに働き、後にアメリカ長老派婦人伝道局に移ったマリア・ツルー (Marie T. True) によって運営された。保育事業の福祉的实践としては、ベントン (Lydia E. Benton) のお茶場学校やツルーの感化の下に教育をうけた二宮ワカの警醒学校附属児童教育所の活動など、枚挙にいとまがない<sup>(1)</sup>。

保育事業に先鞭をつけた婦人宣教師の来日の背景とそれを支えたアメリカの社会的土壌を検討することで、日本の保育論の源流とその内実を明らかにする。

#### 2. 19世紀アメリカ女性の活動における「公」と「私」

独立革命以前のアメリカは、政治活動はもちろん宗教活動においても、それは男性のためのものであると考えられていた。政治の場はあくまでも公共の場であり、女性が関わる私的な家庭空間とは区別されていた。

革命を経て、次第に女性をめぐる空間は変化する。商業、産業の成長は、家庭から「仕事」を分離し、社会的分業の仕組みが明確になる。一方、産業構造の変化は、社会秩序の荒廃への疑念を抱かせ、それを払拭するために、女性に「徳」(virtue) を守る役割を課すようになる。また新しい社会構築の要としての「共和国の母」のイメージによって、女性の目的や使命が定義されていく。

宗教面においては、19世紀は宗教復興の時代といわれる。宗教復興は、言い換えれば信仰が失われつつあることへの警告でもあった。1820年代の第二次大覚醒リバイバルに見られる、女性化された宗教の提示は、新たな担い手としての女性への関心を意味する。女性は、女性の宗教的・道徳的責任感を使って、男性によって隙間のあいたあるいは空になった宗教組織に位置を得、クリスチャンの義務を大義名分とする新しい空間を創造し、女性の団結を押し進めた。女性の伝道協会と日曜学校が作られ、女性達は、今までの女性の領域であった家庭や身近な共同体をも越える世界に手を差し伸べ始めた。女性は子どもたちにとっての宗教的教育者であり、個人のモラルの守護者 (guardians) の役割を担ったのである<sup>(2)</sup>。

もちろんこれらの活動が宗教的意思に支えられたことは事実であるが、女性は家

庭性のイデオロギーに養護されて、また一方では、そのイデオロギーを利用しつつ、新しい公的空間 - すなわち政治、仕事という公的世界と家庭という私的親密性との中間地帯に作られたボランティアの団体 - を作っていった。

ナンシー・コットが指摘するように（当時の女性達の活動は）宗教が慈善の目的をもつものであり（3）、その特色について、マーガレット・フラーは、「19世紀のアメリカ女性達は、当時の男性が喜ぶであろうと思われることに適応した存在の形、活動の形を求め、また男性の望であろう姿を女性が求めた。」と指摘している（4）。当時の女性に対する像を逸脱しないように、家内性（domesticity）と主体的従属（subordination）が強調された。

この時代の女性の活動の中でも、活動規模及びメンバー数からいって、群をぬいていたのが外国伝道協会とアメリカ禁酒会運動（Women's Christian Temperance Union）であった。

アメリカ婦人一致外国伝道協会は、このような社会的土壌から生まれ、本格的に女性による外国女性の支援を打ち出した最初の団体である。1861年、サラ・ドリーマス（Sarah P. Doremas）のリーダーシップの下、有志が集い、ニューヨークで発足した。ドリーマスは、女囚協会、聖書協会、慈善施設、女性のための病院の設立など多方面に活躍した人物である。

同団体は、ビルマ・インド・中国・日本等にステーションを展開し、家庭性の論理を使って広く女性の活動を支持した。ステーションが、通称ホームと呼ばれたことは興味深い。

外国に派遣される女性たちは、アメリカの中流階層の女性や娘・子どもたちの小さな献金に支えられていた [ 図1 . 参照 ]



図1 アメリカ家庭婦人が支えた婦人宣教師海外派遣  
アメリカ婦人一致外国伝道協会（WUMS）が支拂者に送った証明書（1860）  
（Billy Graham Center, Wheaton College 所蔵）



図2 家庭の主役としての「母」のイメージ  
長老派婦人伝道局の子ども向け機関誌  
Children's Work for Children の表紙（1876）

婦人一致外国伝道協会の特色は教派を超えた団体であり、女性のボランタリーに支えられていた点である。しかし、ボランタリーに支えられていた活動とは言え、その内容はプロフェッショナルであることが求められ、海外に派遣される宣教師になるための要件は極めて厳格であった。まず独身であることが求められた。その他、当時の宣教師志願者に対する質問書によると、宗教活動の経験、教育に関する資格、外国語能力、健康、さらに手芸技術、音楽や絵などの趣味に及ぶものであった。

同協会の機関誌、*Missionary Crumbs* (後に *Missionary Link* に改名) 第1号 (1861) には、「この会の目的は、異教の地において、現地女性の働き手を育てるために、(アメリカから) 独身の聖書リーダーや教師を送ることにある」と記されている。そして、最初の宣教師となったミセス・メーソンは次のように訴える。「我々は子どもたちを教育するための女性教師が欲しいのです。男性にはそれができないからです。これは確かめられた事実であり、女性教師の集団なしに、人々は教育されないのです。」さらに強い調子で「我々は女性の教育者を育成しなければなりません。それは不可欠なことです。」と述べられている<sup>(5)</sup>。ここでは、キリスト者と女性と教師という職業が統一的にとらえられている。

婦人一致外国伝道協会が先行する形で、長老派の婦人伝道局をはじめに次々に各教派による婦人伝道局が成立した。慰問袋の活動など南北戦争における実績は、女性の活動を「理念」にとどめず、「実」を入れた。それ以前の女性の小さな組織は、「Charity」"Cent"などの名がつけられていたが、「Mission」を全面に押しだし、女性の宗教的・道徳的責任のレトリックを使って「公」と「私」の中間地帯の活動としてその勢力を有していく。アメリカ全土に、しかも同時期に、女性による団体が飛躍的に拡大したことは興味深い事実である。

国内の各教会では、母親会を組織し、キリスト教徒の母の義務、すなわち教育者あるいはモラルの監督者としての母の義務と責任を実現するための支援とそれに必要な技術の修得を助け、慈しんで子どもを育てる方法を導入すべく、子ども時代の焦点を家父長制的権威から母親の愛情へと移していった。

[図2]の長老派婦人伝道局の機関誌の表紙は、理想的な家庭像と、家庭の主役としての母親のイメージが描かれている。十字架の近くに、また家族の真ん中にどっしりと腰を下ろした母親の姿が象徴的である。

もちろん、この見解の下には、子ども観の変化が伴う。子どもたちは以前のように気まぐれで慎み深い者として考えられるのではなく、理性を持ち、完璧な人間になれる可能性をもっていると考えられた。子どもに無垢性と可塑性のイメージを重ねることは、女性を母親役割に固定する上で、不可欠な事柄であった。それによって、母親と子どもの相補性が生み出され、家庭における母子関係に女性を囲うにたる一体性と安定性を確保していったのである。言い換えれば、近代社会における女性の立場は、子どもに対する意識の変容を伴いながら、母親役割へと固定されていくのである。

以上のように見てくると、女性団体の活動それ自体は、「私」の領域から発して「公」領域へのベクトルをもつ活動である。一方、活動内容は、主体的、積極的に母親役割を女性自身がとるように方向づける側面があった。また後者については、子ども観の変容と不可分であった。

### 3. 保育における「家庭(ホーム)・母親役割の重視

来日アメリカ婦人宣教師の実践として、「横浜お茶場学校」の活動を検証する。労働者の女性達の援助を行った「横浜お茶場学校」は、日本の保育事業黎明期であ

る 1878 (明治 11) 年、ベントン (Lydia E. Benton) によって始められた。ベントンは、アメリカ婦人一致外国伝道協会から 1873 (明治 6) 年に横浜のアメリカン・ミッション・ホームに派遣された宣教師である。ミッション・ホームでは混血児や日本人の子女教育にあたったが、その後、John C. Ballagh と再婚し、アメリカ長老派の婦人伝道局の一員となった。

バラ夫人 (ベントン) がお茶場学校を開くにあたった経緯は、以下のようである。1859 (安政 6) 年の横浜の開港によって、一漁村にすぎなかった横浜は、貿易を中心に大きな変貌をとげる。お茶は生系につく重要な輸出品であり、湿気をとるため外国商館の工場、通称お茶場で、もう一度火を入れ再生され輸出された。新茶が入る 5 月ころから出荷が終わる 10 月頃までお茶の輸出は賑わい、お茶関連の仕事で、人口は数千人増加し、その収入で潤うため、犯罪率は激減した。お茶場は山下町一帯に設けられ、その働き手の大半は、近隣の女性たちであった。女工たちは、先を争って午前 3 時から 4 時頃に横浜公園に集まり、灼熱地獄の中で働き天保銭を稼いだ。女性達は子どもを連れて来るため、工場のまわりの路上には長時間、母親の就労が終わるのを待ちわびる子どもたちで溢れていた。

当時の横浜毎日新聞には、母親が就労している間に、子どもたちが危険な遊びに興じたり、子どもによる弟妹の子守によって悲惨な事故に結びついた記事が散見される (6)。

この現実の子どもの姿を前に、バラ夫人は手を差しのべる。背に追われ日に照らされ暑さにあがく赤ちゃんと路上で過ごす子どもたちをまず自宅に迎え入れた。赤ちゃんにはゴムの取り付けができるビンで牛乳をあたえ、身体面と食事面に配慮した。一方年齢の高い子どもには、歌や聖句の暗唱、聖書の話などがなされた。活動の前には、まず「顔を洗わせた」という記録が物語るように、「清潔」に留意した習慣づけがなされる姿が読みとれる。この活動は、母親たちが就労する間の子どものために休日以外、休みなしで行われた (7)。

1879 (明治 12) 年、バラ夫人は、簡易の託児・保育所を発展させたい意志を、長老派婦人伝道局に伝えた。お茶場学校の拡張計画を見ると、その内容は、母親の就労場所の中心に家を購入し、学校としたい、学校は休日以外、休みなしで開く、

子どもだけではなく、母親に向けても教育活動をしたい、学校運営にあたってはセルフサポートの学校としたい、というものであった。当時としては画期的な計画であったことがよみとれる (8)。

バラ夫人は、当時の日本の女性に対して次のような認識をもっていた。当時の社会層を 4 段階に分けた上で、4 番目の労働層について、「4 番目の階層の女性は、家族をささえるためにお金を稼がなければならないのです・・・(中略)・・・男女対等な討論は、4 番目の階層の女性のみができます。他の階層の女性は、夫の要求に対してさからうことはできない・・・」と述べている。金銭を稼ぎ、家族を支えたくましく働く第 4 階層としての労働者の女性達に対してバラ夫人は、肯定的にとらえ、自ら立つことができる「新しい女性」としての期待を有していたと言える。

保育事業の中で展開された保育論とは、路上で戯れ無為な時間を過ごす子どもたちに「清潔な環境」を与えること、規則正しい生活を与えることであった。その一方、母親には宗教的説話とともに裁縫などの家庭的技術の伝授がなされた。

アメリカの婦人伝道局に送られた書簡には、活動の成果とは何かを示す、次のような子どもたちの描写がなされている。クリスマスに集まった貧しい子どもたちは、確かに「窮屈そうで、古くすりへった着物」を着てはいるが、その着物は、「清潔そ

うでよく修繕されている」と表現されている。すなわち、お茶場学校によってもたらされた成果とは、家庭的技術を身につけた母親によって、「清潔に修繕された着物」に象徴される、母親の子どもに対する適切な監督がなされる姿である(9)。

お茶場学校では、労働者層の子どもたちにもいわゆる中上流層と同等の教育を与え、目の悪い子どもや耳が聞こえない子どもに対しても同様の家庭的配慮を怠らないことを旨としている。当時の日本では依然一般的ではない配慮がここにみられる。また子どもの無垢性が語られ、可塑性に富む存在として教育如何によってその成長は変わるととらえられている(10)。その一方では、「最も上流階層の女性達は、詩を書いたり、きれいな刺繍を作ったり、あるいは何もしないかです」といった批判や日本の家庭は、家族成員と一緒に食卓を囲まないことが批判される。

お茶場の活動は、労働層に対して「家庭(ホーム)」を与えることであり、母親を中心とした家庭改革を目的としたのである。家庭の主役であり、また子どもたちを熱心に保護・監督するという母親像は、女子教育を享受できる一部の中上流階層の女性たちの理念として定着していくものであるが、いわゆる社会の裾野に位置づく労働層に対して、保育・託児所を通じて、共通の理念が伝搬された。

#### D. 考察

日本の近代的保育の発展に寄与した来日婦人宣教師の実践が、宗教的基盤に支えられた家庭の普及を目的とし、母親役割を強調する側面が極めて強いことが明らかとなった。この母親役割の強調は、女子教育を享受しうる女性たちだけではなく、例えば、労働層の子どもたちの託児・保育を実践した「横浜お茶場学校」においてもみられる。お茶場学校は、家族を支え男性と対等に議論しうる働く女性たちへの援助を目的としつつも、求められた母親像とは、家庭的技術を身につけ、子どもの保護・監督に熱心な姿である。家庭の母というイメージを、様々な階層に共通の理念として伝搬したのである。

以上のように、婦人宣教師の実践は、家庭の主役としての女性を認めることで、女性の生きるべき姿、すなわち女性自らが「母を生きることを主体化」する方向へと導くと同時に、画一的で理想的な母親像に収斂させる側面をもっていた。

研究結果から導きだされた「養育責任」に関する問題点を次にあげる。

第一は、家庭の「私化」の問題である。

女子教育や育児・保育論を通して、来日婦人宣教師を媒介に移入された家庭論は、近代的国家を志向した知識層をとらえた。牟田は、明治20年前後をピークに家族の団欒や家族員の心的交流に高い価値を付与する新しい家族のあり方、すなわち「家庭(ホーム)」的な家族を理想とする記事が多くあらわれることを指摘している。しかし20年代後半から30年頃を転換点として、家庭や家族は公論の対象から除外され、もっぱら女性を対象として女性にのみ関わるものとして語られていくようになることを指摘しており、これは家庭の「私化」「女性化」への傾斜を示すものである(11)。

また母子関係という視点でみれば、明治20年代中盤から後半にかけて、例えば来日婦人宣教師との関連が深く、当時のオピニオンリーダーであった『女学雑誌』の誌面の子ども記事が増加し、かつ子どもの無垢性を賛美する傾向が顕著になる(12)。

先にみてきたように、アメリカの女性の活動には、「私」から「公」への方向性と活動内容としての家庭内における母親役割の強調すなわち「私化」の二重構造が見られた。なぜ日本においては、「私化」へのベクトルが優勢であったのか。女性の母親役割の強調と、子どもの賛美あるいは聖化は、それぞれ別個の特性ではなく、互

いに補完することによって、母子中心とした私的領域を確実なものとしていく。日本における「私化」の特性をとらえるためには、日米の子ども観の比較検討が有効であろうし、「母・子ども」の関係性の中で再検討する必要がある。

第二は、保育施設における養育責任者 = 母親という規範の「再生産」の問題である。

言及した明治期の婦人宣教師の実践は、宗教性を有したという点で、近代国家や宗教的基盤をもたない一般の人々に直接的に受け入れられたとはいえない。しかし、ミッション系女学校で学んだ女性達は、女子教育やメディアのリーダーとして活躍した。また保育・福祉事業を通じて、母親役割を主軸とする育児・保育論が展開された。宗教的基盤は、形骸化する形で、家庭理念・母親像は、後に勃興する都市中間層だけでなく、あらゆる階層に伝搬され、規範を形成したと考えられる。今後、保育活動における「再生産」の問題をより実証的に検証する必要がある。

## E. 結論

日本の保育事業の出発点において、母親に「養育責任」を求める傾向が顕著であることが明らかになった。現在、保育施設は、少子化に対応した子育て支援の中心的役割を担う場として期待されている。このことを考えれば、ハード面の充実やサービスの多様性を計るのみならず、現在の保育施設の保育論や保育実践に内在する母親の養育責任の問題を顕在化させ、丹念にその意味を問う作業が求められる。

## 注

- (1) 内藤知美,1999,「明治前期の幼児教育における 19 世紀アメリカの影響 (1)」(日本保育学会題 52 回研究論文集, 446-447)
- (2) エヴァンス (1997) 79-94
- (3) Hill (1985) 24-25
- (4) Boyd (1996) 4-6
- (5) *Missionary Crumbs* No.1, 1861, 22
- (6) 『横浜毎日新聞』(1879.6.3)
- (7) *Records of U. S. Presbyterian Missions, Japan Letters* 1878.8
- (8) *Women's Work for Women* 1879.9
- (9) *Children's Work for Children* 1880.4
- (10) *Children's Work for Children* 1880.4
- (11) 牟田 (1996) 51-77
- (12) 内藤知美, 1993, 「『女学雑誌』にあらわれる子ども - 母子関係の展開を中心として - 」『児童文学研究』第 5 号

## 参考文献

- Boyd, Lois A. and Douglas R. Brackenridge 1996, *Presbyterian Women in America*, PHS  
Boylan, Anne M., 1988, *Sunday School*, Yale Univ. Press  
Cott, Nancy F., 1977, *The Bonds of Womanhood*, Yale Univ. Press  
Hays, Sharon, 1996, *The Cultural Contradictions of Motherhood*, Yale Univ. Press  
Hill, Patricia R., 1985, *The World Their Household: The American Woman's Foreign Mission Movement and Cultural Transformation 1870-1920*, Univ. of Michigan Press  
亀山美知子, 1990, 『女たちの約束』人文書院  
キリスト教保育連盟, 1986, 『日本キリスト教保育百年史』

小檜山ルイ,1992,『アメリカ婦人宣教師』東京大学出版会  
牟田和恵,1996,『戦略としての家族』新曜社  
サラ・M・エヴァンス著 小檜山ルイほか訳,1997,『アメリカ女性の歴史 - 自由のために生まれて』明石書店  
白峰学園保育センター,1987,『保育の社会史』筑摩書房  
横浜開港資料館,1994,『横浜商人とその時代』有隣堂  
横浜共立学園,1991,『横浜共立学園 120年の歩み』  
横浜指路教会,1974,『指路教会百年の歩み』